別紙様式１－２

受託団体名	筑波大学理療科教員養成施設

事業実績報告書

（１）講習対象　理療　~~理学療法~~　~~聴覚障害教育~~　教員の資質向上

（２）事業の実施日程

事　業　項　目	実　施　時　期											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
全国教育委員会・関連学校へ開催通知発送			上旬									
講習会実施				下旬								
事後アンケート等に基づく評価						上旬						

（３）事業の実績の説明

①講習会のテーマ

理療科教育に関連するコミュニケーション技術およびコミュニケーション論

②講習会の日程

日　　程：令和元年 7 月 16 日（火）～7 月 19 日（金）（４日間）
会　　場：筑波大学　東京キャンパス　文京校舎　134 講義室
定　　員：90 名
受講者数：85 名（うち免許更新講習受講者 32 名、受講希望者数 85 名）

日　時	タイトル	講　師	概　要
7月16日 9:30-12:30	コミュニケーション能力とは	筑波大学 人間系 准教授 長田友紀	コミュニケーション能力を構成する要素は種々存在する。一般的なコミュニケーション能力について総論を示し、ワークショップ、グループ討議で認識を深めた。
13:30-16:30	視覚障害者のコミュニケーション能力	愛知教育大学講師 相羽大輔	一般的総論を受け、視覚障害を持つ人たちに特化したコミュニケーションのあり方について解説した。
7月17日 9:30-12:30	コミュニケーション学の実践～evidence based～	慶應義塾大学看護医療学部教授 杉本なおみ	責任と義務を強く求められる医療現場におけるコミュニケーションの実践について認識を深めた。ワークショップ、グループ討議等でコミュニケーション技術の実践を経験した。
13:30-16:30	医療におけるコミュニケーション技術―言語表現技術―	つくば言語技術教育研究所所長 三森ゆりか	言語的コミュニケーションは視覚障害者としても、理療施術者としても重要な要素であり、素養のみでは対処しきれないことがある。ドイツの言語能力訓練を基にスキルアップの方法を解説し、参加型授業で認識を深めた。

7月18日 9:30-12:30	接触を通したコミュニケーション～あなたを大切に思っている心を伝える～	桜美林大学教授 山口　創	治療において、患者様に安心して身体を任せていただく行動、動作について、感覚生理学の知見から解説した。
13:30-16:30	理療科教員に求められる専門性とは	文科省初等中等教育局視学官(併)特別支援教育調査官 青木隆一	理療科教員に求められる専門性について講義した。
7月19日 9:30-12:30	特別支援学校におけるコミュニケーション上の諸問題 コミュニケーション失敗としてのハラスメント事例	聴覚障害者教育福祉協会事務局長 松本末男 筑波大学附属学校教育局教授 雷坂浩之	学校内で発生する様々なトラブル、それは当事者間のコミュニケーション不足、あるいは失敗ととらえ、受講者とともに考え、実例を通して認識を深めた。
13:30-16:30	理療科に必要なコミュニケーション技術としての接遇	筑波技術大学講師 渡辺満枝	接遇は単なる儀礼ではなく、治療や指導を成功に導く策である。実践面から提案した。

③講習の実施結果

本講習会では、受講希望者数は受講者数と一致している。（毎回、同様である）

受講者の事後アンケート（回収率 81%）では、①本講習の内容・方法については、回答者のほぼ全員が「よい」、「だいたいよい」と答えていた。②最新の知識・技能の習得に関する項目でも、回答者のほぼ全員が「よい」、「だいたいよい」と答えていた。③本講習の運営面（受講者、会場、連絡等）については、「よい」、「だいたいよい」が約 8 割とおおむね高い評価を得た。これらの結果から、実施内容に関わる部分では問題はなかったと考える。要望等の自由記述における内容では、今回の講習でグループワークを多く取り入れていたため、グループ形成の段取りについて、２～３件の意見があった。ワークの際にはその内容に応じたグループ編成法を事前に検討しておく必要がある（職場が同じ受講者がかたまっているため）。また、毎回要望に出される意見として、開催時期、講義内容の事前提供さらに講義資料やアンケート等のディジタルデータ提供がある。従来から活字形式、点字形式の講義概要を作成し、講習初日に配布しているのだが、これらのニーズに応じる対策を考える必要があるかもしれない。（「データの事前配布があると、予習ができるので助かります。」「USB によるデータの提供を速やかにしてほしい。」「自立担当で参加の人にも、資料やアンケートをデータでいただけると有り難いです。」「資料のデータが先に欲しかった。」）また、会場の 134 講義室は温度管理が難しいため、例年要望などに含まれているが、今回はなかった。

④障害のある者の受講への対応結果

本講習会の受講者の大半は視覚障害を有しているので、講義方法及び講義資料に関する配慮（講義関連の情報の事前通知、拡大文字資料、点字資料の準備（編集、送付等）、それらを用いた講義形式の講師へのアドバイス等）はもとより、会場誘導等の受講者の安全（会場付近の交差点などに、係員を配置）、さらに災害発生時の安全確保に配慮した。

⑤講習会の実施体制

所　属（団体名）	職　名	氏　名	事業における役割
筑波大学人間系・理療科教員養成施設	教　授	緒方　昭広	代表責任者
筑波大学人間系・理療科教員養成施設	准教授	和田　恒彦	実施補助
筑波大学人間系・理療科教員養成施設	講　師	徳竹　忠司	実施補助
筑波大学人間系・理療科教員養成施設	講　師	濱田　淳	企画作成・実施　総括
聴覚障害者教育福祉協会	事務局長	松本　末男	講師
筑波大学附属学校教育局	教　授	雷坂　浩之	講師
筑波大学人間系	准教授	長田　友紀	講師
慶應義塾大学看護医療学部	教　授	杉本　なおみ	講師
桜美林大学	教　授	山口　創	講師
愛知教育大学	講　師	相羽　大輔	講師
筑波技術大学	講　師	渡辺　満枝	講師
つくば言語技術教育研究所	所　長	三森　ゆりか	講師
文科省初等中等教育局	視学官(併)特別支援教育調査官	青木　隆一	講師

（４）事業の成果

コミュニケーションを本講習会のテーマとしたが、この領域は範囲が広く、講習内容の構築、講師の選定に苦慮した。努力の甲斐があったのか、講習内容については想定外の高評価であった。「多く設定されていたグループワークがとても面白かった。充実した研修を提供していただき、本当にありがとうございました。」「大切なコミュニケーション技法を伝達してくださり、ありがとうございます。勉強になりました。」「大変興味深い内容でした。」「コミュニケーション技術について、初めて知り得た内容が多く、参考になった。ハラスメントの講義は初めて受講し印象に残った。上司や管理職にも伝えてほしい内容だと感じた。」「コミュニケーションをテーマにしながら、どの講師も視点が異なり、大変興味深く受講できました。指導に役立てるよう、自分なりにまとめてみようと思います。」「期待以上に充実した内容の講習でした。」

現在の理療科指導要領の中には、コミュニケーションという語が頻出し、現職の理療科教員の多くが戸惑っているようで、今回の講習会内容の評価がその実情を反映しているのかもしれない。本講習内容が、現職教員の教育活動の一助となり、理療科生徒に還元されていく可能性が見いだせた。

（５）今後の改善事項と方策

例年、100 名弱の視覚障害者が参加する講習会で、個々の視覚障害のニーズに応じた講義方法等をアンケートに基づき検討・実施しているが、個々の受講者のニーズに完全に対応するのは困難であろうが、今後も努力していかねばならないと考える。講義概要データの事前提供については、筑波大 HP から DL できるようになると、利便性が向上するのでは」という意見があったので、担当部署と相談しながら、システム構築について考えてみる。

別紙様式１－２

受託団体名	筑波大学附属視覚特別支援学校

事業実績報告書

（１）講習対象　~~理療~~　理学療法　~~聴覚障害教育~~　~~教員の資質向士~~

（２）事業の実施日程

事　業　項　目	実　施　時　期											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
第１回自立教科等担当教員講習会 （理学療法）実行委員会 ・実施要項の検討と確認			5日									
第２回自立教科等担当教員講習会 （理学療法）実行委員会 ・実施要項の検討と確認			19日									
第３回自立教科等担当教員講習会 （理学療法）実行委員会 ・講義内容の調整			3日									
第４回自立教科等担当教員講習会 （理学療法）実行委員会 ・最終確認と会場準備				30日								
自立教科等担当教員講習会				31日	1日 2日							
第５回自立教科等担当教員講習会 （理学療法）実行委員会 ・反省と今後の課題について						9日						

（３）事業の実績の説明

①講習会のテーマ

新カリキュラム策定に向けての取り組み

②講習会の日程

日　　程：令和元年７月31日（水）～8月２日（金）
会　　場：筑波大学附属視覚特別支援学校
定　　員：15名
受講者数：10名　　（受講希望者数：10名　　）

日　時	タイトル	講　師	概　要
7月31日 ＡＭ	理学療法管理学	東京女子医科大学八千代医療センター　理学療法士	理学療法士に必要な職場管理や職場倫理のあり方などについて、講義やグループセッションを通して見識を深める。

		薄　直宏	
7 月 31 日 ＰＭ	医用画像評価	埼玉医科大学病院 診療放射線技師 高橋　将史	理学療法士に必要な医用画像評価について、考察や治療計画への応用なども含め、講義や実技を通して見識を深める。
8 月 1 日 ＡＭ	薬理学	東京女子医科大学 八千代医療センター　薬剤師 岡本　剛	理学療法士に必要な薬理学について、講義を通して見識を深める。
8 月 1 日 ＰＭ	喀痰と吸引	看護師 秋元　弘子	理学療法士に必要な喀痰と吸引、救急救命について、講義や実技を通して見識を深める。
8 月 2 日 ＡＭ	栄養学	筑波大学体育系 准教授 麻見　直美	理学療法士に必要な栄養学について、講義を通して見識を深める。
8 月 2 日 ＰＭ	総合討議		講習会全般について、目的達成の成果について討議を行う。

③講習の実施結果

１．講座定員と受講希望者・受講者の関係について
すべての講座を通して共通するので、内容をまとめて記述します。
・定員 15 名　受講者数と希望数ともに 10 名（全日程を通して）
・受講希望者は全員参加できた。現在、筑波大学附属視覚特別支援学校と大阪府立大阪南視覚支援学校の現職教員を対象としているので、現行の参加者人数となるが、臨床実習で生徒指導に関わる施設の指導者の参加も、盲学校の生徒指導のレベルアップにつながるものと考える。従って、盲学校教員に加え、臨床実習指導者の受講者数を 5 名程度増やしたいと考えます。

２．各講習内容の実施結果
7 月 31 日（水）午前　理学療法管理学
・理学療法管理学は、新たに内容が創設された領域であり、内容の体系も不透明感があったが、講義を通して、全体の概要が明確なものになった。どの学年で講義を行うことが適切であるかや、講義内容等についても考察する機会となり、大変有意義であった。

7 月 31 日（水）午後　医用画像評価
・医用画像の判別は、理学療法で重要な技術である。一方で視覚障害者にとって、視覚での判別が難しい側面もあり、生徒への授業方法をイメージしながら受講した。視覚判別が難しい部分などを確認できたことは収穫であった。今後どのようにサポートするか対策を講じていきたい。

8 月 1 日（木）午前　薬理学
・薬理学は、リハビリテーションを行う上で、作用、副作用の把握は必須となります。近年、服薬による患者様のトラブルも多く、理学療法士としての管理能力も問われています。一方で薬理学は専門性の高い領域であり、次年度からの新カリキュラムにおける生徒への授業の展開や内容、レベルについて、今回の講義を通して認識することができた。

8 月 1 日（木）午後　喀痰と吸引

・臨床現場において、理学療法士が喀痰、吸引の処置をすることは法律で可能となっている。しかし、技術レベルの専門性が高いことや、学校教育や臨床現場での教育内容の確立が遅れていることもあり、臨床現場での実用性が低い状況にある。しかし、新カリキュラムに授業内容として明確な位置づけがなされ、今回の講義と実技指導から生徒指導の方法を模索していきたい。

8 月 2 日（金）午前　栄養学
・理学療法の専門領域である運動療法は、患者様の栄養状態が良好なうえで効果が発揮されるため、栄養面知識や患者様へのアドバイスは重要となる。今後、特に高齢の患者様への栄養管理は重要となり、基礎的な知識や応用的な指導を行っていくことは大切である。今回の講義では、特に臨床現場での指導についての具体的な事案が多く紹介され、大変分かりやすいものであった。今後の生徒指導にも生かしていきたい。

④障害のある者の受講への対応結果

・必要に応じ講義資料を拡大版で配布した。
・講義終了後に、講義資料（データ）を希望者に配信した。
・実技等の際に弱視教員に晴眼教員が補助を行った。

⑤講習会の実施体制

所　属（団体名）	職　名	氏　名	事業における役割
筑波大学人間系 附属視覚特別支援学校	教授 校長	柿澤敏文	委員長
大阪府立大阪南視覚支援学校	校長	松村 高志	副委員長
筑波大学附属視覚特別支援学校理学療法科	教諭	長島 大介	総務
大阪府立大阪南視覚特別支援学校理学療法科	教諭	水野 知浩	総務
筑波大学東京キャンパス事務部学校支援課附属視覚特別支援学校	係長 係員	武末 敦子	庶務 会計
同上		出口 圭	

（４）事業の成果

平成 30 年の理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則改正、及び令和元年の特別支援学校高等部学習指導要領改正にともなう、盲学校理学療法科の新カリキュラムの教育内容について、最新の知識や技術を盲学校理学療法科担当教員が習得し、生徒への授業展開を構築していく目的で講習会を設定した。内容としては、令和 2 年度から導入される「理学療法管理学」「医用画像評価」「喀痰と吸引」「救急救命」「薬理」「栄養」といった専門性の高いカリキュラムについて講習を行った。各分野とも理学療法士の臨床現場において重点を置かれている内容であるが、学校教育に携わる担当教員は、特に最新の技術的な面の理解が不足しがちである。今回は限られた時間の講習会ではあるが、基本的な内容と臨床現場での応用技術の紹介を網羅した内容であり、今後、更に知識を深めていかなければならないポイントの確認も含めて、大変有意義な内容であった。更に新カリキュラムの授業展開において、視覚障害のある生徒に対する効果的な講義の方法や配慮についても、講習を通して確認することができた。生徒の見えにくさに対する配慮のポイントや、生徒が理解しにくい内容ついても、担当教員間で認識を深めることができた。盲学校理学療法教育の質を高めていくためにも、今回の講習会は非常に意味のある内容であったと思われる。

（５）今後の改善事項と方策

１．定員数の拡大
定員は 15 名（実際の参加は 10 名）であるが、20 名程度まで拡大させることが可能である。臨床実習指定施設の指導者などを中心に参加者の拡大を検討していきたい。
２．テーマの設定について
テーマは隔年で最新のトピックスから設定しており、それも満足度の高いものであるが、ある程度長期的につながりがあるテーマの設定で内容を深めていくことも検討していきたい。

別紙様式１－２

受託団体名	筑波大学附属聴覚特別支援学校

事業実績報告書

（１）講習対象　~~理療~~　~~理学療法~~　聴覚障害教育　教員の資質向上（不要なものを二重線で消す）

（２）事業の実施日程

事　業　項　目	実　施　時　期											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
第1回委員会 (1)講習会テーマ・趣旨の確認 (2)講習会日程の確認）			11日									
第2回委員会 (1)講演･講義､授業設定の確認			18 日									
第3回委員会 (1)指定授業者・講義内容の検討			25 日									
第4回委員会 (1)実施要領の検討				2 日								
第5回委員会 (1)実施要領の決定				9 日								
第6回委員会 (1)実施要領の確認・周知 (2)実務日程の確認						10 日						
テキスト原稿 (1)講演・講義・学習指導案等の執筆の依頼						17 日						
第7回委員会 (1)講習会会場設営等準備計画の検討・確認							15 日					
第8回委員会 (1)テキスト丁合作業等								8 日				
第9回委員会 (1)講習会会場設営								12 日				
聴覚障害教育担当教員講習会								13日 14日 15日				
第10回委員会 (1)講習会内容・運営等の反省									3 日			

（３）事業の実績の説明

①講習会のテーマ

「特別支援学校や難聴学級等に在籍する聴覚障害児の課題と指導の在り方」
～高等部専攻科段階の生徒に焦点を当てて～

②講習会の日程

日　　程：令和元年１１月１３日（水）～１１月１５日（金）
会　　場：筑波大学附属聴覚特別支援学校
定　　員：７０名
受講者数：４２名

日　時	タイトル	講　師	概　要
11月13日 9：40～ 10：30	受付		
10：30～ 10：50	開講式	筑波大学附属聴覚特別支援学校長 鄭　仁豪	本講習会の趣旨説明等を行った。
10：50～ 11：00	オリエンテーション	筑波大学附属聴覚特別支援学校教務主任 眞田進夫	本講習会の日程等を説明した。
11：00～ 11：20	学校紹介	筑波大学附属聴覚特別支援学校副校長 伊藤僚幸	筑波大学附属聴覚特別支援学校の教育理念等を説明した。
11：20～ 12：30	講演Ⅰ 新学習指導要領と聴覚障害教育について	文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特別支援教育調査官 庄司美千代	新学習指導要領の改訂のポイントと、改訂に向けた特別支援学校（聴覚障害）の取組の方向性、さらに指導の在り方について教授した。
12：30～ 13：30	昼食・休憩		
13：30～ 14：40	講義Ⅰ 専攻科教育の実際	筑波大学附属聴覚特別支援学校 高等部専攻科造形芸術科主任 青柳泰生　他	高等部専攻科造形芸術科、ビジネス情報科、歯科技工科における指導の実際について教授した。
14：50～ 16：00	講演Ⅱ 社会的自立の現状と課題	東京聴覚障害者総合支援機構　東京聴覚障害者支援事業所長 矢野耕二	聴覚障害者の就労時の課題と就労支援について教授した。
16：00～ 16：10	諸連絡	筑波大学附属聴覚特別支援学校教務主任 眞田進夫	14日の日程等を説明した。

11月14日 9：10～ 9：20	高等部専攻科の授業の概要説明	筑波大学附属聴覚特別支援学校　高等部専攻科歯科技工科主任 福田靖江	公開授業と指定授業の概要を説明した。
9：20～ 10：10	高等部専攻科 公開授業	授業担当者	高等部専攻科の授業を公開した。
10：25～ 11：15	高等部専攻科 指定授業	授業担当者	高等部専攻科の指定授業を公開した。
11：25～ 12：30	高等部専攻科 授業研究会	高等部専攻科 所属教員	指定授業についての授業研究会を行った。
12：30～ 13：30	昼食・休憩・ 寄宿舎見学（希望者の寄宿舎見学は13:00～13:30）	筑波大学附属聴覚特別支援学校 寮務主任 岡本三郎	寄宿舎見学を希望する受講者には寄宿舎を公開した。
13：30～ 14：40	講演Ⅲ 聴覚障害教育におけるキャリア発達支援	筑波技術大学　学長 石原保志	就労場面での課題を踏まえたキャリア教育の在り方について教授した。
14：50～ 16：00	シンポジウム 専攻科教育の現状と課題	筑波技術大学　学長 石原保志 北海道高等聾学校 桑原一哲 東京都立葛飾ろう学校 柏倉克哉 大阪府立だいせん聴覚高等支援学校 井上通子 福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 野中創 筑波大学附属聴覚特別支援学校 西俣稔子	特徴ある専攻科を持つ学校の担当者をシンポジストにして専攻科の教育課程の工夫、卒業後の支援、専攻科教育の発展のための具体策について協議し、共有できたことを助言者がまとめ、伝えた。
16：15～ 17：30	教育懇談会	筑波大学附属聴覚特別支援学校教務主任 眞田進夫	講師および本校高等部専攻科教員も参加し受講者間の情報交換を行った。
11月15日 9：10～ 9：35	幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科の授業の概要説明	筑波大学附属聴覚特別支援学校 幼稚部主事　桑原美和子 小学部主事　深江健司 中学部主事　佐坂佳晃 高等部主事　横山知弘	幼稚部・小学部・中学部・高等部普通科の公開授業の概要を説明した。
9：50～ 10：30	幼稚部公開授業	授業担当者	幼稚部の授業を公開した。

9：45～ 10：30	小学部公開授業	授業担当者	小学部の授業を公開した。
10：40～ 11：30	中学部公開授業	授業担当者	中学部の授業を公開した。
11：40～ 12：30	高等部普通科公開授業	授業担当者	高等部普通科の授業を公開した。
12：30～ 13：30	昼食・休憩		
13：30～ 14：40	講演Ⅳ 発達障害の理解と支援	白百合女子大学教授 宮本信也	発達障害（神経発達症）についての知識を整理し、その支援方法について教授した。
14：40～ 15：00	閉講式	筑波大学附属聴覚特別支援学校主幹教諭 橋本　時浩	受講者に対し講習会修了証を授与した。

③講習の実施結果

（受講者について）

本講習会（第 46 回）を開催するにあたり、47 都道府県 20 政令指定都市の教育委員会と２校の私立学校（聴覚障害）に案内を発送した。その結果、33 の都道府県政令指定都市から 42 名の参加申し込みがあった。

本講習会のテーマは「特別支援学校や難聴学級等に在籍する聴覚障害児の課題と指導の在り方～高等部専攻科段階の生徒に焦点を当てて～」であった。そのため、受講者の 62 パーセントが特別支援学校（聴覚障害）高等部（専攻科を含む）に所属する教員となり、年齢層も多い順に、40 代 23 名、50 代 12 名、30 代 7 名、20 代 3 名（不明 3 名）（男性 24 名、女性 18 名）であった。年齢層が高くなったこと、例年に比べて男性が多かったことが本講習会の受講者の特徴であった。

また、聴覚障害教育の経験年数は４～６年と１０年以上が 12 名ずつで最も多かった。昨年度の傾向では他の障害種学校で長く経験を積み、その上で特別支援学校（聴覚障害）に異動する年配の教員が多かったが、本年度は専攻科に焦点を当てたことで、技術面を含めて専門的な指導を特別支援学校（聴覚障害）において長年指導をしている教員の受講が多かったと思われる。

（講演・講義について）

４つの講演と１つの講義，シンポジウムを行った。講演は、「新学習指導要領と聴覚障害教育について」から始め、その後の他の講演、講義、シンポジウム、指導場面全体を通して、「キャリア教育と社会自立に向けた支援」について教授した。さらに、特別支援教育のセンター的機能を充実させることをねらいに、「発達障害（神経発達症）の理解と支援方法」の講演も設定した。また、講義では、「特別支援学校高等部専攻科（聴覚障害）における教育の充実」「音声、文字、手話、指文字等を活用した意思の相互伝達の充実」「合理的配慮を踏まえた授業での情報支援の在り方」を踏まえて、本校専攻科で行われている教育活動について報告した。また、シンポジウムでは、特徴ある専攻科を持つ５つの学校の担当者をシンポジストにして専攻科の教育課程の工夫、卒業後の支援、専攻科教育の発展のための具体策について協議し、共有した。

（公開授業・指定授業及び授業研究会）

本講習会では、テーマの中心となった学部学科以外にも、全学部を参観できる機会を設けた。幼稚部、小学部、中学部、高等部普通科、高等部専攻科の全学年で、合計 36 教室分の授業を公開した。子どもたちの育ちの過程を見ることができることから、受講者には好評であり、次年度以降も継続していきたいと考えている。

本講習会での公開授業、指定授業、シンポジウムに向けて本年度中心となった高等部専攻科各科の教員１名ずつが専門科目について知見を広め、指導等に生かすために以下の視察を行った。

・造形芸術科（京都府立京都聾学校）

聾学校における芸術系学科（京都アート科）の取組と進路について伺い、芸術系学科の学習内容充実への取組についての意見交換をすることを目的とした。そして、本校造形芸術科の授業と京都聾学校京都アート科のカリキュラム内で共通点を探り、今後、授業や活動でお互いに少人数教育であるデメリッ

トとして挙がった制作時の鑑賞についてなど新しい試みを提案することができた。このことは、指定授業での生徒同士の作品についての鑑賞を含む話合い活動につなげることができた。また、シンポジウム資料として活用することもできた。

・ビジネス情報科（岐阜県立岐阜商業高等学校・岐阜県立岐阜聾学校）

今日の商業教育と聾学校における商業教育の現状を知り、地域商業高校と聾学校の連携について意見交換をすることを目的とした。普通商業高校の生徒と聾学校の生徒にとっての苦手な部分が共通していることを再認識し、改めて丁寧な専門科目の指導のための教材研究に役立った。また、商業高校と地域企業との連携で新商品開発等を行っていることを知り、本校専攻科で地域企業や近隣の大学と連携してできること等将来的な構想をシンポジウムの資料とした。

・歯科技工科（明倫短期大学歯科技工士学科）

現在の歯科技工業界の最先端技術である CAD/CAM を取り入れた実習の様子や ICT 教材の活用実態などを把握することを目的とした。そして、実習作品の評価法として観察項目を細かくすることによって、より客観的に評価し、その結果を生徒に還元する利点を確認することができた。指定授業において歯科技工物製作の基本である歯の形態構築技術の育成という目標を達成するために、見本歯型の提示方法の工夫としてスキャンした歯型の３D データを教員が見ているのと同じ画面を生徒のスマートフォンで確認する方法を取り、生徒にとっては、教員と同じ視点で形態の確認ができることは、とても参考になり、上達を早めることに繋がると思われる指導に反映することができた。

指定授業は、高等部専攻科造形芸術科１年（デザイン総合Ⅰ）の「タイポグラフィーオノマトペをデザインするー」、ビジネス情報科２年(簿記)「会計ソフトによる処理」、歯科技工科３年（歯科技工実習）「歯冠部ワックス形成トレーニング」であった。授業研究会は、１科ずつ時間を区切って実施した。

受講者からの質問は、造形芸術科では、「言葉の指導と感覚を重視した授業展開」、ビジネス情報科では、「専門用語の定着を図る指導の工夫」、歯科技工科では「文字情報提示等の有効な合理的配慮」等があった。共通の話題としては、「専攻科の教育課程作成上の工夫」「社会に出たときに必要な知識と技術の指導」「就職後のコミュニケーション上の課題と支援」等があった。社会が合理的配慮の意識を高め、聴覚障害生徒の高等教育機関への進学が増加傾向にある一方で専攻科生徒数の減少が課題としてある。しかし、専門的な知識と技術を身に付けさせて社会へ生徒を送り出す専攻科の必要性を意識した質問や話題が多く、社会への出口に対する受講者の意識の高さを感じた。充実した授業研究会であった。

（受講者からの事後アンケート）

・全体を通しての意見や感想：「専攻科教育の講演、附属の状況なども知ることができ良かった。とても勉強になった。」（特別支援学校（聴覚障害）専攻科 40 代男性）「どの講習も最新の情報を聞くことができ、大変勉強になった。小学部担当だが、今担当しているこの将来について考える良い機会となった。どの道を選んでもたくましく生きていける子に育てたいと改めて感じた。」（特別支援学校（聴覚障害）小学部 40 代女性）「現在専攻科の担当教員として直面している課題や悩み（生徒の減少、離職など）に関連する講演ⅡとⅢを受講できたことは有意義だった。障害認識、メタ認知、説明を最後まできちんとできる力、日本語をしっかり教えるなど今後の充実した教育活動をする上でヒントとなることを多く学ぶことができた。活用したい。」（特別支援学校（聴覚障害）高等部 40 代男性）「高等部進路担当なので、高等部になってからでは遅い、小さい頃からの取組が必要というのを感じているところだ。とても勉強になった。勤務校には専攻科がないので専攻科の様子を直接知ることができ良かった。」（特別支援学校高等部 50 代女性）「就労に向けた課題の実際や様々な専攻科の話が聞けたのが良かった。」（特別支援学校（聴覚障害）高等部 40 代女性）

・公開授業や指定授業についての意見や感想：「非常に刺激になり、参考になった。様々なＩＴ機器の活用は有効に活用してこそ意味のあるものだと再認識できた。（特別支援学校（聴覚障害）高等部 40 代男性）「専攻科の先生方が親切で生徒達のために頑張っていることが分かった。進路選択の一つとして生徒に勧められる。」（特別支援学校（聴覚障害）高等部 40 代女性）「どの講演、公開授業も勉強になった。筑波附属の設備の整っていること、生徒達が積極的に学んでいること等すばらしいと感じた。」（特別支援学校（聴覚障害）高等部 40 代女性）

・シンポジウムについての意見や感想：「大変勉強になった。各県の取組をきいて自分たちの取組に

自信を持てた部分もあるし、刺激をもらい、もっとこうすればいいと考えさせられた点もあるし、持ち帰って話題にしたい。」（特別支援学校（聴覚障害）中学部 30 代）時間が短かった。2 コマとってもよい内容だった。（特別支援学校（聴覚障害）高等部 40 代男性）「専攻科について様々な地域の現状を知ったことで聾学校の幼～高の間に育てるべき力についてより理解できた。」（特別支援学校（聴覚障害）中学部 20 代女性）「様々な考え方や取組を知ることができ、とても有意義だった。専攻科教育についてもっと詳しく聞きたかった。」（特別支援学校（聴覚障害）高等部 40 代男性）

・今後の講習会に対する要望：今後の講習会で扱ってほしい内容として「子供の言葉や心の育ち」「心理面の支援」「小学部の外国語活動、外国語の実践、プログラミング教育の実践」「聴覚障害教育とアクティブラーニング」「教科別の指導技術」「自立活動」「交流及び共同学習」「ICT 機器」等があった。こうした声に応えての講習会が開催できるよう、内容を検討した上で来年度の申請準備を進めたい。また、内容は充実しているが、質疑に関しての時間が十分ではないとの指摘もあることから、この点についての改善も図っていきたい。

（運営について）

講習会１日目の開始時刻を 10 時 30 分とし、最終日の終了時刻を 15 時としている。遠方からの受講者からは参加しやすいとの声が多かった。交通機関の乱れもなく予定通りの日程で無事終了することができた。資料は「テキスト」の他に「専攻科の実践集」、「各学部の指導案集」を配付した。会場設営、本校職員の対応は丁寧であり、研修に集中できたとする評価をいただいた。

（その他）

教育懇談会は講習会２日目の 16 時 15 分から 17 時 30 分に設定した。本校高等部専攻科教員や講師，シンポジストも加わり情報交換が活発に行われた。さらに質問をしたり議論を深めたりする時間として受講者からは好評であった。また教員間のネットワークづくりの機会にもなった。

（参考）

以下、事後アンケートの集計結果である。受講者総数４２名中４０名からの回答があった。

●受講者の所属

特別支援学校（聴覚障害）教員38名 （複数の部局にまたがって所属する場合を含む）								他の特支教員 0名	小学校教員 1名	中学校教員 1名
教相 0名	幼稚部 0名	小学部 3名	中学部 9名	高等部 24名	支援部 0名	その他 2名	未記入 0名	通級指導 0名	難聴学級 1名	難聴学級 1名

●受講者の年齢層

20代	30代	40代	50代	未回答
3名	7名	18名	12名	0名

●受講者の性別

男	女	未回答
22名	17名	1名

●受講者の聴覚障害教育経験年数

0～3年	4～6年	7～9年	10年以上	未回答
11名	12名	5名	12名	0名

●研修内容の活用方法（複数回答を含む）

職員会議で報告	学部会議で報告	校内の研究会等での報告	その他
11名	12名	10名	15名

④障害のある者の受講への対応結果

受講者の中に、聴覚に障害を有する教員が６名いたため、講演内容の情報保障を行った。今回は手話通訳とパソコン要約筆記について派遣要請を行い講演会場に配置した。パソコン要約筆記の文字表示用モニターは、講演会場の前方左右に配置し、講師や手話通訳者が移動した際にも視線を移すことなく文字情報を見られるようにした。また、シンポジウムの際には、後方の受講者にも、着席して話

すシンポジストの表情や様子が分かるように前方左側スクリーンに大写しした。講習会テキストや講演・講義の内容等を、手話通訳者に渡し、事前学習等の準備をしていただいている。パソコン要約筆記は、聴覚障害を有さない受講者にとっても、内容の後追いや確認の際に活用され、講習会の運営が全体的に丁寧であるとの評価につながっている。

講演・講義担当者には、パワーポイントや動画を活用してもらうなど、受講者が文字や映像等の媒体からも情報を取得し理解を深められるように配慮した。さらに、講演・講義担当者には紙媒体での配付資料の作成を依頼し参加者に配付した。Ａ４用紙にスライド４コマを大きめに設定して配置したため、参加者からは読みやすかったとの言葉をいただいている。

専攻科の紹介や日頃の指導の様子の映像等を、主会場のある棟においてタブレット等を用いて表示した。これは、障害の有無に関係なく、多くの受講者に好評であった。情報提供方法として継続していきたい。また、質問対応の会場係が笑顔で対応し、丁寧で有り難かったという声をいただいた。

⑤講習会の実施体制（講師を含む）

所　属	職　名	氏　名	役　割
文部科学省初等中等教育局 特別支援教育課	特別支援教育 調査官	庄司美千代	講演Ⅰ担当者
東京聴覚障害者支援事業所	所長	矢野耕二	講演Ⅱ担当者
筑波技術大学	学長	石原保志	講演Ⅲ担当者 シンポジウム助言者
白百合女子大学	教授	宮本信也	講演Ⅳ担当者
筑波大学附属聴覚特別支援学校	教諭	西俣稔子	シンポジウム担当者
北海道高等聾学校	教諭	桑原一哲	シンポジウム担当者
東京都立葛飾ろう学校	教諭	柏倉克哉	シンポジウム担当者
大阪府立だいせん聴覚高等支援学校	教諭	井上通子	シンポジウム担当者
福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校	主幹教諭	野中　創	シンポジウム担当者
筑波大学 筑波大学附属学校教育局	教授 准教授 准教授 附属学校教育局 次長・教授 准教授	鄭仁豪 加藤靖佳 左藤敦子 濱本悟志 飯田順子	委員
筑波大学・筑波大学附属聴覚特別支援学校	教授・校長	鄭　仁豪	委員長
筑波大学附属聴覚特別支援学校	副校長	伊藤僚幸	副委員長
筑波大学附属聴覚特別支援学校	主幹教諭	橋本時浩	委員
筑波大学附属聴覚特別支援学校	教務主任	眞田進夫	委員
筑波大学附属聴覚特別支援学校	幼稚部主事	桑原美和子	委員
筑波大学附属聴覚特別支援学校	小学部主事	深江健司	委員
筑波大学附属聴覚特別支援学校	中学部主事	佐坂佳晃	委員
筑波大学附属聴覚特別支援学校	高等部主事	横山知弘	委員
筑波大学附属聴覚特別支援学校	専攻科歯科技工	福田靖江	委員・講義Ⅰ担当者

筑波大学附属聴覚特別支援学校	科主任 専攻科造形芸術科主任	青柳泰生	委員・講義Ⅰ担当者
筑波大学附属聴覚特別支援学校	専攻科ビジネス情報科主任	武林靖浩	委員・講義Ⅰ担当者
筑波大学附属聴覚特別支援学校	寮務主任	岡本三郎	委員
筑波大学附属聴覚特別支援学校	事務係長	竹之内恵美	委員

（４）事業の成果

令和元年 11 月 13 日（水）から 15 日（金）の３日間の日程で、筑波大学附属聴覚特別支援学校を会場に、「令和元年度（第 46 回）聴覚障害教育担当教員講習会」を開催した。本講習会は文部科学省が公募する「特別支援教育に関する教職員等の資質向上事業」に応募し採択を受けて実施されたものであり、主催は文部科学省と筑波大学である。

講習会開催にあたり、47 都道府県 20 政令指定都市の教育委員会と２校の私立学校（聴覚障害）に案内を発送し、その結果、33 の都道府県と政令指定都市から 42 名の申し込みがあった。教師としての資質や教育現場での実績が評価されての参加となっている。

本講習会のテーマは「特別支援学校や難聴学級等に在籍する聴覚障害児の課題と指導の在り方～高等部専攻科段階の生徒に焦点を当てて～」と設定し、理論と実践の２つの側面から、聴覚障害教育（高等部専攻科）における今日的な状況と課題について考えを深めることができるような内容と構成にした。

講演の内容と講師については以下の通りである。

講演Ⅰ　「新学習指導要領と聴覚障害教育について」
　　庄司美千代（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課　特別支援教育調査官）
講演Ⅱ　「社会的自立の現状と課題」
　　矢野　耕二（公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京聴覚障害者支援事業所長）
講演Ⅲ　「聴覚障害教育におけるキャリア発達支援」
　　石原　保志（筑波技術大学　学長）
講演Ⅳ　「発達障害（神経発達症）の理解と支援」
　　宮本　信也（白百合女子大学教授）
講義Ⅰ　「専攻科の教育」
　　青柳　泰生（筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部専攻科造形芸術科主任）
　　武林　靖浩（筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部専攻科ビジネス情報科主任）
　　福田　靖江（筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部専攻科歯科技工科主任）
シンポジウム「専攻科教育の現状と課題」
　　助言者　　石原　保志（筑波技術大学　学長）
　　シンポジスト　桑原　一哲（北海道高等聾学校　教諭）
　　柏倉　克哉（東京都立葛飾ろう学校　教諭）
　　井上　通子（大阪府立だいせん聴覚高等支援学校　教諭）
　　野中　創　（福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校　主幹教諭）
　　西俣　稔子（筑波大学附属聴覚特別支援学校　教諭）

講演は、「新学習指導要領と聴覚障害教育について」から始め、その後の他の講演、講義、シンポジウム、指導場面全体を通して、「キャリア教育と社会自立に向けた支援」について教授した。講演と講義につながりが有り、受講者の理解をより一層深めることになったと思われる。さらに、特別支援教育のセンター的機能を充実させるため「発達障害（神経発達症）の理解と支援」の講演も設定したことによって特別支援教育の今日的課題についても教授でき、受講者の好評を得た。また、初の試みであるシンポジウムでは、特徴ある専攻科を持つ５つの学校の担当者をシンポジストにして専攻科の教育課程の工夫、卒業後の支援、専攻科教育の発展のための具体策について協議し、共有することができた。初めての試みではあったが、聴覚障害生徒にとっての専攻科の必要性の再認識と生徒数減をどのように工夫して克服していくかについて考え合うことができた。勤務校におい

て専攻科以外の所属である受講者からも、それぞれの部の発達段階が社会への出口の教育にどのようにつながるのか理解できる内容であった。全体を通して、進路選択、社会自立、専攻科の在り方、就職後の課題と現状等、卒業後に目を向けた支援について教授ができたと思う。

指定授業は、高等部専攻科造形芸術科、ビジネス情報科、歯科技工科で展開した。その後の授業研究会では、専攻科における具体的な指導の工夫だけでなく、教育課程作成時の工夫や就労に向けての一人ひとりの特性に応じた指導について考え合うことができた。

幼稚部から高等部専攻科までの発達段階の授業を公開することにより、幼少期から一貫して日本語を大切にする指導や話合い活動から深い学びへとつなげる指導の実際を研修いただけたと思う。

以上のように講演・講義、シンポジウム、指導場面を通して、本講習会のテーマに迫ることができたと考えている。受講者が特別支援学校や難聴学級に在籍する聴覚障害児の一人ひとりの特性に応じた指導がいかにあるべきかを考えながら今後の指導をされることが期待できる。

（５）今後の改善事項と方策

学習指導要領の改訂と全面実施に向けた時期に対応した内容及び現在の聴覚障害教育の課題と指導の在り方に特化した講習会は、受講者にとってニードが高かったとアンケートの分析から思われた。本年度は、高等部専攻科の生徒に焦点を当てたが、講演、講義の内容の中で、社会に出て行く際における、幼い時からの言語、心理面を基盤とした指導の重要性が多く取り上げられていた。そのため、次年度以降は、2020 年度から新学習指導要領が全面実施となる小学部若しくは 2021 年度から全面実施となる中学部の義務教育段階に焦点を当てて、学習指導要領と関連させたテーマで講習内容を設定することを検討する。また、質疑応答の時間を十分にとれるよう運営を改善したい。

情報保障の面では、手話通訳及びパソコン要約筆記を引き続き丁寧に行うことによって、聴覚障害を有する受講者の研修の充実を図る。これは、聴覚障害を有さない受講者に対する啓蒙にもなり、各県での合理的配慮の充実につながると考えられる。